

日高の軽種馬育成調教場では、昨年未までに調教場に隣接する近隣牧場から歩いて利用できる出入口ゲート（5箇所の内3箇所）を、従来の手押し式開閉柵から職員の開発による電動式開閉バーに変更しました。従来の手動による柵の開け閉めの煩わしさが解消され、利用者の方々からも好評です。年内には残りの2箇所にも設置予定です。また、屋外の各砂馬場の路盤改修が昨年ですべて終了し、今後は冬季の凍結による影響も少なく、春早い時期からの利用開始が期待できます。今後も調教場の利用の向上・促進に努めてまいります。

当センター研修生は、今月からJRA育成馬による騎乗訓練を開始し、順調に研修に励んでおります。昨年7月から当センターのホームページ内に「研修生のページ」を設置、約2週間おきに更新しております。研修生自らが執筆した日頃の彼らの様子や感想等がうかがえますので、のぞいてみてください。また、昨今の経済不況により世間では就職難と言われておりますが、騎乗者に関してはまだまだ人材不足で、希望者も少なく「金の卵」となりつつあり、人材確保が危惧されるこの頃です。（Y.H.）

新年を迎え、「たづな」では、財団法人馬事文化財団の田村正明理事長に、馬に関する自然科学および馬と人との社会科学的側面の両面から博物学的取り組みに対し、古くから歴史ある馬と人とのかわりこれから発展性について新たな話題をいただきました。馬に対する関心が益々高まることを願ってやみません。

寒くなると流行しやすいものの一つとしてインフルエンザがありますが、馬では昨年の何故か夏に突然発生しました。「調査・研究」では、軽種馬生産地での的確な防疫対応で、爆発的な蔓延防止を阻止できた実態や今後の対策について掲載しました。馬インフルエンザの早い終息を願っています。「馬にみられる病気」では、競走馬の骨折の発生メカニズムについて考察しました。偶発的に起こると思われがちな競走馬の骨折の多くが、成長期にある若い馬ではレースや調教に伴う強い運動負荷により骨折を起こしやすい骨構造に変化していることに起因することがお分かりいただけだと思います。「科学の箱馬車」では、妊娠馬に甚大な損害を与える原因となる子宮に分布する血管の破綻について、これまでに得られている知見を紹介していただきました。軽種馬生産の損耗を少なくするために、今後の研究の進展が期待されます。（T.Y.）